

「ペットのモノを盗んだならペットとして償え」万引きバレたカントボーイが首輪とケージで犬扱いされ三回中出して雌ペットに堕ちる話

閉店後のペットショップは、犬の寝息だけが聞こえる。

棚に伸ばした指先が、ジャーキーの袋に触れた瞬間だった。

「白崎」

背中に、声が突き刺さった。

低い。静かすぎるくらい低い。——犬飼さんの声だ。

「っ……」

振り返れない。ポケットに手を突っ込んだまま、足が床に縫い留められている。

犬飼さんの足音が近づいてくる。革靴がタイルを叩く音。一步。また一步。

「事務室、来い」

断る選択肢なんてなかった。

モニターには8分割の映像が映っていた。日付・時刻つきで、僕がポケットにジャーキーを入れる瞬間が、何日分も、何本分も、全部残っていた。

「す……すみません、弁償——」

「弁償？」

犬飼さんはデスクに座ったまま、スマホの画面を僕に見せつけた。映像のダウンロード。バックアップ。クラウド保存。

一つ一つの操作を、ゆっくりと。

「警察呼ぶか」

心臓が止まった。

「それとも——ここで償うか」

警察だけは。前科がつく。実家に連絡がいく。そしたら僕のこの身体が——カントボーイだって——全部バレる。

「ぺ、ペットのモノを盗んだの……は、わかってます……っ。だからなんでも——」

「なんでも、か」

犬飼さんが立ち上がった。186cmの身体が目の前に壁みたいに立ちはだかって、僕の163cmなんか影に吞まれる。

「ペットのモノを盗んだなら——ペットとして償え」

壁面の棚に手を伸ばした犬飼さんが、赤い革の首輪を一本取った。中型犬用。Mサイズ。

僕の細い首に——ちょうどいいサイズ。

「つけろ。自分で」

手が震えていた。革の質感。金具の冷たさ。犬の匂いがかすかに残っている。

首に巻いて、バックルを——カチッ。

その音が、閉店後の無人の店に硬く響いた。

「四つん這い」

膝をつく。手のひらが冷たいタイルに触れる。犬飼さんが訓練用の短いリードを首輪のDリングにパチンと繋いだ。

「……っ」

リードを引かれて、四つん這いのまま通路を這う。膝がタイルに擦れて痛い。

通路の両側に、犬たちのケージが並んでいる。柴犬が首を傾げて僕を見た。ゴールデンレトリバーが尻尾を振った。チワワがきゅんきゅん鳴いた。

——僕と同じように、首輪をつけた犬たちが。僕を見ている。

飼育スペースの奥。大型犬用の金属ケージの前で犬飼さんが立ち止まった。

「入れ」

四つん這いのまま身体を押し込む。天井が低い。頭がぶつかりそうで、さらに身体を低くしないと入れなかった。中にはペットシートが敷いてあって、犬の匂いがする。

ガチャン。格子扉が閉まる。カチリ。南京錠がかかる。

「犬と同じだろ。盗みを働くのは——駄がなっていない証拠だ」

犬飼さんがケージの前にしゃがみ込んだ。格子越しに僕の顔を覗き込む。——新しく入荷した仔犬を初めて観察する時と、全く同じ目。

「お前、カントボーイだろう」

全身が凍った。

「……っ、な、なんで——」

「健康診断書に書いてあった」

バイトの採用時に出した書類。誰にも知られたくなかった。
この人にだけは。

犬飼さんの大きな手が、格子の隙間から伸びてきた。

「動物の身体検査は毎日やってる。——お前のも、俺が診てやる」

「ズボン脱げ。検査だ」

ケージの中は狭い。膝をついたまま、ベルトを外して、ズボンを下ろすだけで肘が格子にぶつかった。

「下着も」

「……っ♡♡ む、無理……っ」

「無理じゃない。脱げ」

下着一枚になった僕を、犬飼さんは格子越しにじっと見た。
しゃがんだ姿勢で、上から下まで。犬の体格を確認する時と同じ目つきで。

「っ♡♡ そ、そんなに見ないで……っ」

犬飼さんの右手が格子の隙間から伸びてきた。金属の格子と格子の間——幅は5cm くらいしかない。犬飼さんの太い指がぎりぎり通るくらいの隙間。

その長い中指が、下着のクロッチに触れた。布越しに、僕のその位置を正確に探り当てて——上から、すう、と一本線をなぞるように。

「やっ……さわ、らな——っ♡♡」

後ずさろうとした。背中がケージの奥壁にぶつかった。奥行き120cm。僕一人分しかない。逃げ場なんて5cmもない。

犬飼さんの指がクロッチを横にずらした。格子越しに、覗き込んでくる。

「なるほど。——確かに雌の構造だ」

獣医が犬の外陰部を視診する時の声。感情がない。なのに指は正確に割れ目の中心をなぞって、上端のクリトリスを探り当てた。

(やだ……っ♡♡ そこ……さわらないで……っ♡♡)

生まれて初めて他人にそこを触られている。自分でもほとんど触ったことない場所。見たくもない場所。カントボーイだって知られた上に、格子の隙間から弄られてる——犬と同じケージの中で。

「小陰唇の色は薄い。未使用だな」

犬飼さんの指が割れ目を左右に開いた。内側のひだの色と厚みを確認するみたいに。

「んっ♡♡ やめっ……見ないで……っ♡♡ おねがいっ……♡♡」

「陰核のサイズは——犬より小さいが、反応はいいみたいだな」

親指の腹で、クリトリスの包皮を持ち上げた。下に隠れた小さな突起が露出する。

——くり、と押された。

「ンッ♡♡♡」

腰がびくっと跳ねた。ケージが金属音を立てて揺れる。隣のケージのダックスフントがびくっと顔を上げた。

「っ♡ あ♡ やだっ♡♡ やだっ♡♡ そこ触っちゃ——ッ♡♡」

格子越しだから、犬飼さんの指の可動域は限られている。手首の角度が取れなくて、外側——クリトリスと割れ目の入り口——にしか充分に届かない。奥に指を入れようとすると格子に手の甲が当たって、第一関節くらいしか入らない。

なのに。

その「限定された刺激」が——もっと欲しいって思わせてくる。

包皮を剥かれた突起を、親指の腹で円を描くようにこねくり回された。くり、くり、くり。反時計回りに。同時に中指の先端が割れ目の入り口をくちゅ、くちゅ、と浅く搔き回す。

「ふうっ♡♡ んっ♡♡ んんん……っ♡♡ やだっ♡ そこっ♡ いじらないでっ……♡♡」

(男なのに……っ♡♡ こんなとこ触られて……っ♡♡ 声出ちゃう……っ♡♡)

入り口の肉ひだが犬飼さんの指先にきゅう、と吸いついた。——でも奥には届かない。

奥が。

今まで存在すら自覚しなかった「奥」が——空虚にひくひくと疼き始める。何か足りない。何かで埋めてほしい。自分でもその感覚が何なのか分からなかった。

「声出すな。——犬は無駄吠えしない」

格子に額を押しつけて歯を食いしばった。金属の冷たさが額に食い込む。犬飼さんの指がクリトリスの包皮を完全に剥き上げて、露出した突起を直接こねくり回す。乾いた親指の腹が小さな肉を擦る。にちにち、と。

「はっ♡ はっ♡ ふ……っ♡♡ ぐ……っ♡♡ やだ……っ♡♡
へんに、なる……っ♡♡」

（おまんこ……っ♡♡ おまんこが……変になっちゃう……っ♡♡♡）

生まれて初めて、その言葉が頭に浮かんた。カントを今までそう呼んだことなんてなかった。なのに犬飼さんの指にこねくり回されてるうちに、そこが「おまんこ」としか呼べない場所が変わっていく。

「——濡れてきたな。犬の発情と同じだ」

犬飼さんが格子越しに自分の指を見た。透明な粘液が糸を引いている。

「っ……見ないで……っ♡♡」

「中型犬のメスより分泌が多い。触っただけでこれだけ出るのか」

中指の先を割れ目の入り口にぐっ、と押し込まれた。格子越しだから第一関節——たった2cmが限界。でもその2cmで入り口の肉ひだをくりくりと回されて、同時に親指でクリトリスを押し潰される。

「ひっ♡♡ ひっ♡♡ ひあっ♡♡ あ……っ♡♡♡ やだっ♡♡ にてん……どうじ……っ♡♡」

上と下。外と入り口。四つん這いの腕がガクガク震え始めた。

（やだ……っ♡♡ おまんこ……おまんこがっ……♡♡ 指……指もっと入ってきて……って……っ♡♡♡ 何考えてるの……僕……っ♡♡）

奥が欲しい。格子越しの2cmじゃ足りない。もっと深く、もっと中を——

「あっ♡♡ あっ♡♡ ひ、おおおおっ♡♡♡ やだっ♡♡ イッ——♡♡♡」

人生初の絶頂が——ケージの中で来た。

四つん這いの腕が崩れてペットシートに顔が落ちる。尻だけが上がった体勢。犬が服従のポーズを取る時と同じ形。犬飼さんの指がまだそこに触れたまま、痙攣を指の腹で味わっている。

隣のケージで、ダックスフントがクウン、と一声鳴いた。

「……っ♡♡ ……♡♡ ……は……っ♡♡」

犬飼さんが格子から手を引き抜いた。自分の指を見る。僕の愛液で光っている。

「1回目の検査終了。合格だ。——よく鳴けた」

柵から犬用のジャーキーを一本取って、格子の隙間から差し入れてきた。

「ご褒美だ。——口で咥えろ」

涙がこぼれた。ペットシートの上にぼたりと落ちた。犬飼さんは表情を変えない。

南京錠が外される。カチリ。ケージの扉が開く。ギイ、と金属が軋んだ。

「出ろ。——次は洗浄だ。動物は清潔が第一だからな」

リードを引かれて、四つん這いで這って移動する。トリミング台まで。金属製で、表面に滑り止めのゴムシートが貼ってある。台の端にグルーミングアームが立っていて、先端にループ状のノーズワイヤーがぶら下がっている——犬がトリミング中に動かないよう固定するための器具。

犬飼さんが僕を台の上に乘せた。腹這い。首輪のDリングにノーズワイヤーのループを通して固定される。台の反対側から脚が垂れて、爪先がかろうじて床に届く。

腰から尻、そしておまんこまで——完全に無防備。

「っ♡♡ やだ……っ♡ この体勢……っ」